



■フォトエッセイ■

台湾を見守る総統府

写真・文 池上 寛
Hiroshi Ikegami

台湾を統治する総統および副総統が執務を行っているのが総統府である（写真①）。この総統府は、かつて日本が台湾を統治していた時代には台湾総督府と呼ばれていた建物である。今の地に建てられたのは一九一九年のことであり、当初の総面積は一万坪を超え、当時の東アジアでは屈指の広さであったという。一九三五年には火事、一九四五年にはアメリカによる空襲で被害を受け一部が消失している。また、近年まで何度かの改修をしているが、現在でもその建物を使用している。一九九八年には国定古蹟（日本で言う重要文化財）に指定された。

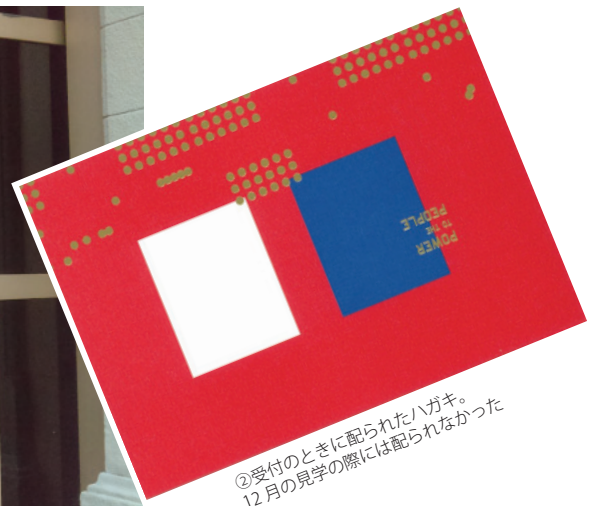
この総統府は、一部ではあるが見学することが可能である。総統府のホームページによると、見学できるようになってから二〇一六年末の累計見学者数は三〇〇万人を超えており、多くの人が見学に訪れている。平日見学は午前中のみである一方、月に一度開放される休日見学の場合には朝から夕方まで見学可能である（年に一度だけ朝から晩まで公開）。以前の平日見学の場合には事前予約が必要であったが、二〇一六年一月中旬からは事前登録は一五名以上の団体のみ必要となった。（平日、休日に関係なく、見学の場合にはパスポートや居留証などの身分証明書が必要）。

また、平日見学の場合には一階の限られた部分しか見学ができない一方、休日見学では他の階の一部の部屋も公開されている。休日見学では、より開かれた総統府を見学できると言ってもよいであろう。

ところが、である。実は二〇一六年は四カ月近く、総統府は公開されていなかった。これは、二〇一六年五月に台湾で史上三回目の政権交代



③正門前の憲兵と見学者。普段ではありえない光景



②受付のときに配られたハガキ。
12月の見学の際には配られなかった



③中山庁を見下ろす孫文の胸像。胸像の下に孫文が好んで使った「天下為公」が書かれている



④玄関ホール（中山庁）。正門をくぐって階段を上ると、ここに到着する

セキュリティチェック後、いよいよ建物内の見学ということになる。まず正門前から建物のなかに入ることになる。正門には普段から憲兵が立っており、簡単に通行することはできない。しかしながら、この日は見学者が通るので、見学者が立っている様子をマジマジみたり、動けない憲兵を囲んで写真を撮るといった普段では考えられないようなことも起きている。そのため、憲兵が苦笑いしている（写真③）。正門をくぐると、玄関ホールである（写真④）。ここは、現在では中山庁と呼ばれ、孫文を顕彰するために二〇一五年に当時の馬英九総統が名づけたものである（孫文は本名とは別に孫中山という名前を使用していた）。階段を上れば、孫文の胸像がホールを見下ろす形で鎮座しており、多くの見学者が記念撮影をしていた（写真

が行われ、蔡英文総統が就任したことによるものである。政権交代を機に常設展の展示内容が一新され、リニューアルするためであった。そして、二〇一六年九月一八日から見学が再開された。このリニューアルを手がけたのは若手のデザイナーであり、平均年齢は二〇歳台と報道されている。どのように新しくなったのかも興味があり、一〇月の休日見学に参加してきた（一二月も写真を撮るために再度見学した）。

総統府は最高権力者がいるところであるので、見学でも当然入場するためのセキュリティチェックは厳しい。入場を待っていると、警備員から一枚のハガキが渡された（写真②）。赤地に青と白の色が抜かれ、小さい字であるが、「POWER TO THE PEOPLE」と書かれている。ポップなデザインで、おそらくこれもデザイナーによって作成されたのであろう。



⑦常設展示の入口の床に大きく書かれている



⑥3階大ホール（経国庁）。雨天時は庭で開催できないイベントをここで行うこともある

⑤。中山庁の後は、三階にある大ホールの見学をした（写真⑥）。ここは、総統および副総統が就任宣誓や外国使節団などの会見を行う場所である。元々はこの大ホールに名前がなかったのがあるが、当時の馬英九総統が一九七八年から一〇年間、総統を務めた蔣経国にちなんで二〇一六年三月二十九日に経国庁と名付けた。この命名に対しては、当時野党であった民進党などから批判があがった。すでに退任（政権交代）が決まっているこの時期に、かつて馬英九総統が通訳を務めた蔣経国にちなんで大ホールに命名をすることは不適切との意見が出たのである。結局、政権交代後も今のところ、経国庁の名前は変わっていない。

これらのホール見学後は、一階の常設展示である。一階に降りると、写真②に書かれた入口ガンが床に書かれていてまず目に入る（写真⑦）。置かれているチラシ（日本語もあり）をみると、「我々の時代、国民の総統府」を常設展示のスローガンとし、総統府の建物としての変遷や構造など七つの分野から総統府の魅力を伝えるとしている。そのなかの一つに、「日常」の分野があり、総統の業務としての役割だけではなく、そのなかでどのような業務の職員が従事しているのかなどが明らかにされている。また、総統就任式の際に立法院長から渡される中華民国の璽（じ・印鑑）のレプリカや総統名の祝電なども展示されている（写真⑧-1、2）。

また、「時代」の分野では戦後の中華民国総統に就任した七名の顔写真が並び、モニターではその業績をみることが出来る（写真⑨）。モニターをみると、李登輝元総統以降の四名には



⑨ 2000年代以降の3人の総統（右から陳水扁、馬英九、蔡英文）の写真。下のモニターには主要業績が時系列で放映されている



⑧-1 璽（じ・印鑑）。左は栄典用、右は中華民国の璽。いずれもレプリカ



⑧-2 総統・副総統が送る祝電。左はリオオリンピック・女子重量挙げ53キログラム級で許淑淨選手が金メダルを獲得したときに蔡英文総統が送ったもの



⑪ 総統府内にある庭。かつては自転車置き場であったという。平日は見学で庭に出ることはできない



⑫ 2016年5月20日に発行された総統就任記念小型シートの原画タイル。かなり細かい作業に驚いた

いけがみ ひろし／アジア経済研究所 在台北海外調査員

1997年入所。2016年3月から2年間の予定で台北で台湾の国際物流に関する調査を実施中。



⑩ 民主化以降に実施された主な社会運動の一部。画像は2000年代後半以降のもの

動画もある一方で、蒋介石、嚴家淦、蔣経国の業績は新聞記事や写真だけで構成されており、時代を感じた。「声」の分野での展示では、台湾で一九八〇年代末から総統府前の広場で行われた主な社会運動（デモ）について取り上げられている（写真⑩）。台湾では戒厳令が一九八七年に廃止されるまでデモや集会は許されていなかった。社会運動を取り上げることによって、常設展示のスローガンにも合致するようにしたのであろう。

常設展示とは別に五つの展示室が別途設けられており、期間ごとに展示内容が変わるように

なっている。さらに、休日見学では二カ所の庭も開放されており（写真⑪）、天気によれば演奏会などの行事も開催されているようである。展示とは関係ないが、総統府のなかには郵便局もあり、蔡英文総統の就任に際して発行された切手の原画タイルが展示されていた（写真⑫）。世界の国々のなかで最高権力者の執務施設を一部とはいえ常時見学できる場所はまずないであろう。その意味で、台湾に行く機会があれば、総統府はぜひ見学していただきたい施設のひとつである。